私の愛する貴方へ
あなた
―貞淑妻の絶頂陥落―

妻が失踪して3日が経った。連絡はまだ無い。
夫が仕事から遅い帰宅をすると自宅には誰もいなかった。妻は夫の帰りが遅いのをなじりはするが、自分が遅くなるコトはない。珍しい事だった。
近くのコンビニにでも出かけてるのかと、夫は気楽に構えていた。新聞を広げた。
その晩、妻は帰ってこなかった。
朝、夫は不安を抱えながら出社した。妻の実家に電話したが、そこにもいなかった。一応かけた彼の実家もそうだった。仔が出来ないことを何かにつけて愚痴る姑に、妻が会いに行くとも思えなかったが。
夫の携帯にはメールも留守番電話も妻からのモノは一つもなかった。あるのは山のような仕事に関するモノだけ。夫は大手商社の社員だった。エリートと呼んでいい。
長く海外に赴任していて、妻もそれに同行していた。今回、日本に戻れたコトをとても喜んでいたのも彼女だった。
妻が不妊に悩んでいたことは夫も知っていた。以前、子宝に御利益のある温泉があると妻が言っていたのを思い出した。そこに行ったのかもしれない。そうであってほしい。
音信不通が3日経って、夫は警察を考えた。事件に巻き込まれたのかもしれない。
明日、警察に相談に行こう。そう考えて帰宅すると、門前の郵便受けに便箋が入っていた。宛名には彼の名が。差出には妻の名があった。間違いなく妻の字だ。慌てて封を切った。

夜　自宅にて
帰宅した私を笑顔で迎える妻
仕事の疲れも癒されるようだ

朝　自宅寝室にて
朝弱い私を優しく起こしてくれる妻
毎朝、ありがとう

なにをするの、やめなさい!?
だれか、たすけてっ、たすけてぇッ
あなた、あなたぁ
イヤ、イヤ、イヤ、いやぁッ!!

某月某日　決行日　ターゲット宅にて
いきなり襲いかかった俺に恐怖し
あばれ、わめきたてる恭子
ここで犯すつもりはなかったが
スイッチが入ってしまった
下着を剥ぎ取り、無理やり挿入した
その下着を口にねじ込んで4時間犯した
ぐったりして動かなくなった恭子の耳元で
俺は自分の素性を明かした
恭子は目を見開いて俺を見た

私の愛する貴方へ。
連絡が遅れて申し訳ありません。私はいま、友人と温泉に来ています。
来てみて驚いたのですが、凄い山奥で電話もインターネットも繋がりません。まさに陸の孤島です。この手紙も山を降りる他のお客さんに無理を言って頼みました。
私たちがこんなところに来たのは、不妊治療のタメです。この温泉に浸かって長期療養すると体質が変わるそうで、これまでにもたくさんの人が子宝に恵まれたそうです。私もココならと思い、滅多に出ない直行バスに乗りました。
それに一度、都会の喧騒を離れてゆっくりしたかったというのもあります。お義母さんと話していると、少し、気が滅入ってしまうので。そういうワケで、私たちはココで長期滞在する予定です。事後承諾になって申し訳ありません。いろいろタイミングが悪かったのです。許してください。私の愛する貴方へ。

場所不明　監禁後

夫を安心させる為に手紙を書いた。

真実などとても書けない。

彼の言ったコトは本当なのだろうか。

場所不明　監禁後

嘘を通すタメに姑に悪役になって貰った。

本当の部分もあるので許してください。

恭子を誘拐してきて1週間が経っていた。
恭子の肉体は素晴らしかった。
野暮ったいエプロンの下に潜んでいたのは、豊満な肉とシミひとつ無い柔肌だった。俺は恭子のカラダに溺れた。
恭子は、溺れなかった。諦めに満ちた、人形のような顔で俺に抱かれ続けた。
カラダは応えていた。むしろ積極的だった。年齢で遥かに若いハズの俺の肉体と欲望に、呼応するように激しく反応した。
肌をまさぐれば桃色に染まった。乳首を食めば硬く立ち上がった。秘所に舌を這わせれば湧水のごとく濡れて溢れた。奥まで貫けば熱くキツク包んで締めた。激しく出し入れすれば生き物のように蠢いて逆に俺の剛直を追い詰めた。そして最奥で放った高圧の精を、一滴も逃さず子宮に呑んだ。妖しく律動して次弾のおねだりさえした。ＳＥＸするタメだけの肉体だった。食べ、眠る以外は全てそうした。
それでも、その顔は変わらなかった。快楽に溺れるコトを、恭子の意志は頑なに拒んだ。夫以外の男に抱かれる自分を悔やんでいた。貪欲に反応する肉体を恥じていた。
最高のオンナだった。
この女を妻にしながら、仕事なぞに励めるあの男は不能に違いなかった。貪っても貪っても、喰い足りなかった。舐め、噛むたびに味が変わった。俺のカラダの下に有るのは天上の甘露だった。
恭子。俺の親父の妻。今は俺のオンナだった。

監禁後1週間　アジトにて
食事と睡眠以外の時間を
すべて俺とのSEXに費やす恭子
既にカラダは俺の形に慣れて嵌まり
屈服して受け入れている
それでも折れない恭子のココロ
最高の女だ

SUGAR

手紙を読んで、夫は安心した。
警察になど行かないでヨカッタ。とんだ恥をかくトコロだった。手紙に所在地は書いていなかったが、消印をみれば確かに遠方だった。
心配させて、正直ハラが立った。しかし、不妊治療のタメの湯治と聞けば認めざるを得なかった。妻の子供に対する執着を夫はよく知っていた。実家もそれを望んだ。
それに仕事が立て込んできていた。明日からまた海外出張だった。長引けばひと月ほど家を空けるかもしれない。どうせ妻を置き去りにするのなら、都会より温泉地のほうが良かろう。
子供に関して、夫には悔いがあった。
入社間もない頃、交際していた恋人がいた。それが妊娠した。実家が裕福だった彼は、堕胎費用と十分な慰謝料を渡して別れた。彼女は子供をおろして田舎へ帰ったと噂で聞いた。
産まれていれば18か19か。昏い目で想った。

日常　自宅付近にて
近所で遊ぶ子供たちをニコやかに見つめる妻

朝　台所にて
鼻歌を口ずさみながら朝食の支度をする妻
妻の作るベーコンエッグは絶品だ

彼のＳＥＸは激しかった。彼はまるで私が彼のモノであるかのように自由に扱った。

こんな年上のくたびれた私を、まるでこの世で最後の女であるかのように貪った。私は征服された。性器も口もオシリも、彼の味を知ってしまった。彼は太く、長く、硬かった。先端のカサが胎内の壁を激しくコスッた。私は気が狂いそうになった。

最後は必ず中に出した。尖った亀頭で子宮の入り口をガッチリ捕まえて、高圧の精子を射た。私は射精の真の意味を子宮で知った。中に当るのがわかった。そして熱かった。

カラダの奥から征服された。

しかし私は妻だった。愛する夫の妻。心だけは征服されてはいけなかった。どんなにカラダが屈服しても、心は明け渡さなかった。カラダがどんなに、彼の所有物を認めてしまっていても、心だけでつなぎ止めた。

彼は夫の仔だと名乗った。確かに面影があった。顔のパーツもそうだが、雰囲気が似ていた。抱かれて確信した。彼は夫の仔だった。夫よりたくましく強い夫の仔。精液の味が一緒だった。

彼は、私を受精させたいようだった。

「無理よ。私は子を産めないの」

これまで、口にしたコトのない言葉だった。産める、としか言ったコトがなかった。涙が出た。認めたくなかった。私は、産めない。

目を閉じて呟く私を、彼は抱き上げた。

「恭子は仔を産む。俺が、産ませる」

彼は断言した。そして、キスしてくれた。

場所不明　監禁後２週間目
彼との激しいＳＥＸに疲労困憊の私
既に通算の回数で夫を超えているだろう
カラダは既に屈服している
夫の元に戻ったとき
果たして満足できるのか
とても不安だ

俺は抱き上げた恭子を、犯していた床からベッドに運んだ。大した意味はない。仔が産めないと目を瞑る恭子を、少し優しく抱いてやりたくなっただけだ。

もう一度キスしてから、乳房を吸った。

恭子は黙って受けていた。弛緩した肢体から汗が香った。懐かしい香りだった。

母が亡くなったのはついこの間だった。交通事故だった。俺の為に働きづめだった母だった。父親のことは知っていた。見に行ったコトさえあった。せめて伝えてやろうと尋ねた。

以前とは違っていた住所を探している間に夫婦が不妊で悩んでいるコトを知った。おしゃべりなオバサンからだった。もう何年も、多額の費用をかけて治療を受けていると聞いた。俺は呆れた。

母は、堕胎の為に投げ捨てられた金を、俺を産んで育てる為に使った。母は正しかった。

しかし死んだ。

この理不尽に、俺は黙り込んだ。

不妊で悩む父たちを、ヒドく滑稽に思った。子供ならここにいるのに。堕胎の為に使った金を、今度は妊娠の為に投じている。

腹が立ってきた。母には堕ろせと吐いておいて、新しい女には産んでくれと頼んでいるのか。

協力してやるよ。

ふと思った。名も知られぬ息子の義務かもしれなかった。

母には見せるコトの出来なかった孫の顔を、その女のハラから出してやる。そう思った。

監禁後2週間目　ベッド上にて
不妊を告白して自ら傷つく恭子
哀れに思い、ベッドの上で優しく抱いた
恭子は戸惑っていた
優しくされると拒絶しにくいらしい
可愛いオンナだ

妻とは見合い結婚だった。
少し歳が離れていたが、お嬢様大学を卒業したてだという彼女を、若かりし夫はひと目で気に入った。口うるさい母親も家格が釣り合っていると喜んでいた。
縁談はトントン拍子に進んだ。結納を交わし、一流ホテルで豪華な結婚式を挙げた。新婚旅行はモルディブだった。
南国の青い海で、初めてみる新妻の水着姿は例えようもなく眩しかった。
初夜、彼女は処女だった。夫は喜んだ。
苦痛を耐えきった妻を、夫は優しく労わった。
仕事で出張の多い夫に、妻はよく尽くしてくれた。慣れない海外赴任にも着いてきてくれた。
よく出来た妻だった。申し分ない。
子供なんていなくてもイイじゃないか。俺達は十分に幸せだ。勝ち組だよ。
海外の空の下、夫はそう妻に想いを馳せた。

見合い当日　高級割烹中庭にて
私の巧みな話術に、たちまち
顔を綻ばせる若かりし日の妻
商談で鍛えた口先が役に立った

見合い当日　高級割烹にて
初めての御見合いに
緊張する若かりし日の妻
私は彼女にひと目惚れした

体験版を御笑覧いただき、

ありがとうございます。

体験版の内容はココまでです。

続きは製品版でお楽しみ下さい。

ありがとうございました。

私の愛する貴方へ

2012年6月27日　初版

著者：Miyafool
Feather Novels

http://featherblog.feathernovels.fool.jp
Eメール info@feathernovels.fool.jp

イラスト協力
G.J?『佐野俊英があなたの原画マンになります』
S/N:GJ0318832

Copyright©2012MiyafoolFeatherNovelsAllRightsReserved

この物語はフィクションです
実在の人物、団体等には
まったく関係ございません。
なお、ストーリー上、違法行為に
あたる記述の部分もありますが、
当サークルはこれらの行為を
助長する意思は全くありません。
この物語に登場する架空の
キャラクターは全て20歳以上の
設定です。
よろしくお願いします。